

浜林正夫著

『小林多喜二とその時代』

—— 極める眼』

評者：梅田 俊英

本書は、マルクス主義の史的唯物論に基づくイギリス革命史などの研究者である浜林氏による、プロレタリア文学研究書である。最初は著書と著者の取り合わせに意外を感じたが、著者が小樽出身と知って得心したところである。

本書の企画・編集は、「白樺文学館多喜二ライブラリー」である。最初にこの団体を紹介したい。白樺文学館は、2000年に元日本オラクル会長・佐野力氏によって設立された文芸博物館である。同館は、千葉県我孫子市にあり、志賀直哉旧宅の近くに建設された。当初、「志賀直哉文学館」とする案もあったが、遺族の意向により志賀の名前を冠することが行われず、白樺派の文学館という内容を表す名称となった。設立者の佐野氏は小樽商科大学（多喜二の頃は小樽高等商業学校）出身で、多喜二の後輩にあたるという。御本人の若き頃、文学にあこがれていたこともあって、このような文学館設立の意志となったのであろう。「多喜二ライブラリー」は、2003年7月に開設された同館付属の施設である。東京都港区麻布十番にある。以上の団体の運営はすべてボランティアの人々によって行われているという（以上は、多喜二ライブラリーの佐藤三郎氏の談話による）。いわば、市民運動の一環の中でこのような組織が誕生しえ

たと言えよう。

多喜二ライブラリーが設立された理由は以下のようなものである（白樺文学館インターネットホームページ、04年12月12日ダウンロード）。

「小林多喜二という優れた才能は、その“死”が歴史的に大きな事件として語り継がれているために、文学者としてよりも社会運動の犠牲者として認知され続けております。その死から70年が経ち、その功績に着目する機会は年々減少しているのが事実です。小林多喜二と彼の文学を再検証するため、……港区麻布十番に開設いたしました。

なぜ麻布十番なのか

ここ麻布十番界隈は、多喜二が地下生活を始めてから非業の死を遂げるまでの10ヶ月間、隠れ家を転々としながら命懸けて創作活動に明け暮れた場所です。いわば、小林多喜二が文学者として懸命に生きていた事を見届けていた場所なのです。多喜二が望んでいた事、生きて筆を執り続ける事のために懸命に一日一日を送った場所こそが新しい多喜二論を語る場所にふさわしいのではないのでしょうか。そんな思いからこの場所に準備室を開設いたしました。」

さて、本書は同団体の活動のひとつとして刊行されたものである。目次を紹介しよう。

第一章 革命と芸術 第一節 マルクスへの道 第二節 作家への道

第二章 二重人格のような 第一節 ストリンドベリとバルビュス 第二節 バルビュスからマルクスへ

第三章 断然、マルキシズムに 第一節 文壇へのデビュー 第二節 「社会のめぐり出し」 補論 多喜二と野呂栄太郎

第四章 プロレタリア作家同盟 第一節 新しい出発 第二節 プロレタリア作家同盟

終章 悠々と流れる大河のような作品を 補論 北洋史から見た「蟹工船」（井本三夫）

多喜二「分骨」の行方を追って—もう一つのエピソード（藤田廣登）

本書の意図は、浜林氏によれば「社会科学の視点から」多喜二を見直してみようとするものである。具体的に言えば、それは「方法論の問題」「社会認識の問題」「階級闘争の問題」である（本書「はじめに」より）。

最初に、多喜二がいかにしてマルクス主義、とりわけ史的唯物論を獲得していったかについて叙述されている。そのなかで、多喜二が志賀直哉の文学に出会い（多喜二は生涯、志賀を文学者として尊敬している）、葉山嘉樹の作品に衝撃を受ける中で創作活動に向かうことが描かれている。つづいて、小樽港湾争議などにかかわり、ナップ小樽支部を結成したりする活動について述べられ、「一九二八年三月一五日」を発表して「文壇へのデビュー」を果たすことに筆が及んでいる。筆者によれば本書は「小林多喜二の伝記」ではないとされているが、ほぼ伝記となっている。ただ、多喜二の理論性の問題も検討されている。例えば「政治と芸術」とのかかわりの問題で「大衆性」の問題についても論及されている（116ページ以降）。また、多喜二がプロレタリア作家同盟書記長として二七年テーゼ・三二年テーゼを受け入れていたこと、その上で、文学により「天皇制支配体制」を「具体的に、生々しく、描いていた」（137ページ）とされている。

これ以後は、作家同盟での活動と、多喜二の作品の検討が行われている。こうして多喜二の活動について「文学の党派性を確立しつつ、しかもその芸術性を高める」（174ページ）ことが生涯の課題であったと評価されている。評者も、多喜二の文学は「芸術性」の高い作品だと思っている。ところが歴史を振り返ると、多喜二が虐殺された33年頃から、作家同盟などで

作品に「レーニンの党派性」を要求する見解が高まってくるのである。その中で、以前の「芸術性」「学術性」の高いものは「文化主義」として批判されてしまうのである。現代の時点で、多喜二の文学を「政治と芸術」の枠組みの中で評価するというのはいかかなものであろうか。

現在、いわゆるプロレタリア文学はあまり読まれないし、まして書かれもしない。時代があまりに異なってしまったからであろう。しかし、旧来のイデオロギーをはずして、再度プロレタリア文学を読み直すと別のものが見えてくると言える。その試みの代表が、荒俣宏『プロレタリア文学はものすごい』（平凡社新書、2000年）であろう。同書によれば、プロレタリア文学とは「ホラー小説」であり「探偵小説」であり「セックス小説」であり「SF」であり「立川文庫」である。「プロレタリア・リアリズム」には、徹底的にリアリズムを追究するものとしての「くそリアリズム」の面があった。そのために、「ものすごい」汚い場面、セックスの場面、残酷な場面などが徹底的に描かれるのである。多喜二の前掲作品や「蟹工船」などはその典型であろう。これらのように、現場取材などに立って緻密に現実が描かれた作品は、現代においても生命を持っていると言えよう。勇ましく当時の政治課題を描いた観念的な作品には、現在においては何の価値もないといわねばならない。

本書と、その母体となった前述の「多喜二ライブラリー」は、現代における多喜二理解の大きな助けとなるものであろう。また、本書「補論」も作品理解の一助ともなるものであるといえる。

（浜林正夫著『小林多喜二とその時代—極める眼』東銀座出版社、2004年8月、233頁、1905円+税）

（うめだ・としひで 法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員）